

宇都宮大学自校教育科目「宇大を学ぶ」の創設と実践[†]

廣内 大輔*・丸山 剛史**
宇都宮大学基盤教育センター*
宇都宮大学教育学部**

概要：自らが学ぶ大学について理解を深める「自校教育」が全国的に広まりつつある。自校教育には、自大学の歴史や理念あるいは現状等に関する学修を通じて、大学に対する帰属意識を醸成することだけでなく、明確な進学・入学動機が希薄になりつつある現代の学生に向けた導入教育としての役割もある。本稿では、この自校教育をめぐる全国的な動向を把握したうえで、宇都宮大学で平成24年度後期に開講された自校教育科目「宇大を学ぶ」の取組みについてその詳細を報告する。

キーワード： 自校教育，大学史，初年次教育，学士課程教育，教養教育

1. 「自校教育」へのニーズ

学生にとって自らが通う大学とは、単に学位の発行を担う行政機関としてのみ機能するだけに留まらず、在学することを通じて、その大学独自の文化や校風が彼らを薰陶していくなど、正規のカリキュラム外においても人間形成に少なからぬ影響を与える存在であることは無視できない。

ところが学生の多くは、自分の在籍する大学が、いつの時代に、どのような理念や要請に基づいて設立され、いかなる道を歩んできたのか、また、他の大学との間にはどういった差異を認めることができるのかといった事柄について、それらを知悉したうえで入学した者はおろか、入学後に関心を持って知ろうとする者さえ少ないように思われる。

今世紀に入り多くの大学において、「自校教育」あるいは「自校史教育」等と称される類の授業科目が正課カリキュラムの中に登場している背景には、上述のような帰属意識の欠如や自大学の存在意義に関する大学側の危機感があることを示しているとも言えよう。実際、我が国の大多数の学生にとって進学先の選択とは、主に偏差値に象徴される大学の威信度や難易度による、本意とは言い難い「振り分け」

に左右される部分が大であり、明確な動機や目的意識を持ってその大学のその学部¹⁾に在籍することを選択した学生は限られている^{2) 3)}。

また、偏差値を介した半自動的なマッチングは、愛校心の希薄化といった問題に留まらず、大学生活への不適応に繋がる恐れもあり、何らかの方策によって、個々の大学の特色や存在意義を理解させ学生の帰属意識を醸成することができれば、より効果的な教育・学修活動に資する。

こうした状況のもと、自校教育や自校史を重視する動きが、個別の大学だけでなく政策レベルでも進展しつつある。例えば、平成20年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」は、入学者を大学生活へと円滑に移行させる初年次教育の例として、「自校の歴史の学習等」を挙げている⁴⁾。また、認証評価機関の一つである大学基準協会の評価基準では、教育の質を保証するシステムの構成要素として「大学沿革史の編纂」や「大学文書の保存と活用」を明示しており⁵⁾、自校について情報を整理しそれを伝えていく取組みが、広く大学教育全体の質向上に繋がるものとして理解されつつある。

2. 我が国における自校教育の歴史と展開

事例の報告に先立ち、我が国における自校教育について、その定義と歴史的経緯を概観しておく。自校教育の研究で知られる大川一毅は、自校教育を「大学の理念、目的、制度、沿革、人物、教育・研究等の現況、社会的使命など、自校（自学）に関わる特

[†] Daisuke HIROUCHI* and Tsuyoshi MARUYAMA** : The Implementation of "Own-University Education" in Utsunomiya University.

* Liberal and General Education Center, Utsunomiya University

** Faculty of Education, Utsunomiya University

性や現状，課題等を中心的な教育題材として実施する一連の教育・学習活動」と定義している⁶⁾。

こうした類の教育活動は，一部の大学においては1990年代の後半から取組まれていた。例えば，1997年には明治大学で「日本近代史と明治大学」が，早稲田大学では「歴史的存在としての「早稲田」の歴史に学ぶ」が，九州大学においては「九州大学の歴史」がそれぞれ開講されている⁷⁾。また，同じ1997年に立教大学にて実施された「大学論を読む」は，1999年には「立教大学を考える」に，2001年には「立教大学の歴史」へと発展している⁸⁾。さらに，広島大学でも2001年に「広島大学の歴史」が始まるなど⁹⁾，自校教育は近年目覚ましくその導入が進んでいる。

前述の大川が2008年8月に科学研究費補助金によって国内の全大学752校(当時)を対象に行った調査によれば，全大学の18%にあたる136校において自校教育が実施されていることが明らかにされている。それらの主な内容や方向性について大川は15の類型を示したうえで，代表的な5つ類型について解説を加えている。それらは次に示す①～⑤である¹⁰⁾。なお，それぞれについての説明は大川の解説を筆者なりに理解し要約したものである。

①「自校理解教育類型」

大学の理念や沿革など様々な観点についての情報を得て当該大学を総合的に把握することに務めるもの。

②「初年次教育類型」

大学で学習を進めるうえで必要なコミュニケーションなどの基礎的・予備的スキルを教えるプロセスの一部に自校教育を含めるもの。

③「専門領域導入教育類型」

大川はここで帯広畜産大学の「全学農畜産実習」を例に挙げ，このような特定の学問分野への導入オリエンテーション的な性格を有するものであるとする。

④「大学史(自校史)教育類型」

それぞれの大学が歩んできた経緯を歴史学や教育史の観点から解説するもの。

⑤「地域理解教育類型」

大学が位置する地域社会に対し視点を向けることで，大学と地域，学生と地域との関係について考察を深めるもの。

3. 宇都宮大学における「宇大を学ぶ」の創設

本節では，宇都宮大学において自校教育科目「宇大を学ぶ」がいかなる経緯を経て開設に至ったかを振り返る。

現在「宇大を学ぶ」は本学の学士課程教育のうち，基盤教育と呼ばれる区分にて開講されている。この基盤教育とは，日本の多くの大学において教養教育，一般教育，共通教育などと呼ばれる括りと理解してよく，各学部で展開される専門科目群と対をなすものである。「宇大を学ぶ」は，この基盤教育の中の大区分「教養科目」の下にある「総合系科目」という「系」(小区分)の中に置かれている選択科目である。総合系科目には，従来型の教養科目の分類には馴染まない科目，企業等外部からの提供科目(寄付講座)，および参加型・双方型の能動的な学修スタイルを核とするアクティブ・ラーニング科目が置かれる区分である。

なお，「宇大を学ぶ」が開講される2012年度までの基盤教育カリキュラムには，自校教育に類似した科目として，学長である進村武男が代表教員を務める「先輩に学ぶ」(旧称「宇大で学ぶ」)を確認することができる。「宇大で学ぶ」の内容は，学長，理事・副学長，学部長など幹部クラスの教職員が自身の専攻分野について解説することを中心とするものであった。これを先の大川の分類に照らし合わせると，学内の様々な学部や部署の話を書くという点では①の要素を，各登壇者が自ら専攻する学問分野を紹介するという点では③の要素を含んだものであったと考えることができる。この科目は2012年度よりその内容を，各担当者の専門分野よりもむしろこれまで歩んできた人生を振り返りつつ学生にメッセージを伝えるという方向にシフトさせ，名称を「先輩に学ぶ」へと変更している。

こうした状況にあって，2011年8月に着任した筆者の一人である廣内は，崇高な理念や宗教的使命に基づいて設立される私立大学とは異なり，本学を含む国立大学の多くは確固たる理念を有しておらず，在学生がその代替不可能性や，そこに帰属意識を持って学び共に歴史を作るということに対する認識が低いのではないか，という思いを抱くとともに，大学そのものの歴史や現状に焦点をあてた科目が開講されていなかったことから，本格的な自校教育科目の開講を望んでいた。また，もう一人の著者であ

る丸山は本学の沿革誌について、1990年に『宇都宮大学四十年史』が刊行されて以来、続編にあたるものが編まれておらず、執筆に際し蒐集、活用されたであろう貴重な史料群が附属図書館の一角に山積みになされたままの状態となっていることを憂慮しており、こうした史料を発掘することで本学の歩んできた道を再度検証し、後世に伝えていくことの重要性を認識していた。

そこで廣内と丸山および基盤教育センター長・塚本純、生涯学習教育研究センター教授・廣瀬隆人が意見を交わしながら、歴史と現状の双方を盛り込むこと、地域社会からゲストスピーカーを呼ぶこと、事務職員にも教壇に立つてもらふことなどを含む全体的な構想を企画し、本学における自校教育科目「宇大を学ぶ」を立ち上げるに至ったのである。なお、複数の学部の教員が連携して担当することや、ゲストスピーカーを招聘するといった要素は、当時試行段階にあった「アクティブ・ラーニング科目」の要件とも合致していた。

初年度、この授業に登壇したのは筆者である廣内と丸山のほか、本学に学生および教員として通算40年以上在籍する農学部教授の津谷好人、ゲストスピーカーには、事務職員で40年に渡り本学の歴史とともに歩んできた工学部事務長の塩野目正昭、および本学の門前町とも言える宇都宮市峰地区で生まれ育ち、牛乳の製造販売業を営みながら、70年近く地域と宇都宮大学を見つめてきた永島宏氏の2人を選び、招聘した。

4. 「宇大を学ぶ」の実践

「宇大を学ぶ」を実際に開講するにあたっては、事前に基盤教育センター所属の英語担当教員らの協力を得てチラシの配布を行ったが宣伝として十分とは言えず、最終的に確定した受講生は5名（国際学部1名、教育学部1名、農学部1名、工学部2名）に留まった。数多くの授業科目があるなかで、どのようにそれらを学生に周知し受講に繋げるかは基盤教育改革の今後の課題の一つである。

以下に、この授業のシラバスや授業に際し作成・配布した資料を参照または引用しながらその概要を紹介する。

【授業の内容】

「自らが学ぶ大学について関心を持ち理解を深める

ことは、大学生活をより豊かなものにしていくことにつながるという理念のもとに、宇都宮大学の歴史や現状について高等教育制度の概要を交えながら講義する。」（シラバスより）

【授業の到達目標】

「我が国の高等教育の全体像を俯瞰し、その中に宇都宮大学を相対化して捉えることができるようになること。宇都宮大学の歴史と現状について他者に説明できるようになること。」（シラバスより）

【学習・教育目標との関連】

「自らが通う大学についてさまざまな観点から学び、宇大を相対的に見るができるようになることは、教養科目の目標である幅広い視野と豊かな人間性の育成に繋がる。それは将来的に、各人の社会観、振舞い方やコミュニケーションの取り方にも影響を与えられるが、このことは総合系科目が目指す行動的知性の形成に資すると考えている。」（シラバスより）

【本授業の趣旨】

「自らが学ぶ大学について関心を持つことは、大学生活をより豊かなものにしていくことにつながるという理念のもとに、宇都宮大学の歴史や現状、および高等教育を取り巻く実態についての概要を講じることで、高等教育の全体像を俯瞰しそこに宇都宮大学を相対的に捉えられるようになることを主たる目標とする。」（第1回授業配布資料より）

本授業は2012年度後期10月2日から開始し、2013年1月22日まで全15回に渡り実施した。15回の主な内容は次のとおりである。

第1回

オリエンテーション。特に、成績評価の方法が調べ学習の発表とレポートによることを説明。そのテーマ選びについては、宇都宮大学の歴史や現状に関係する事柄の中から設定するか、本学に限らず我が国の高等教育に関するものであれば自由とすること、また、これら2つの選択肢を組み合わせてもよいことを述べた。

本学について学ぶ授業でありながら、本学以外の事柄をもテーマとすることを認めた理由は、宇都宮大学に関する史料・資料が豊富でなく、とりわけ学生が自由にアクセスできる資料は限られていることを考慮してのことであり、かつ本授業の目標に謳うとおり、日本の高等教育全体の中に宇都宮大学を相

対化して捉えることに資するからである。

第2回

日本の高等教育制度の概要。本学についての学修に先立ち、我が国の高等教育全体を広い視野で眺めることをねらいとした。「高等教育」という言葉の定義するところを種々の事典・辞典類を参考に解説するとともに、短期大学と4年制大学の学校数の推移、在学生数等の数値を示すことで日本の高等教育が主に私立セクターによって支えられていることを説明した。

また、高等教育研究で著名なアメリカの社会学者 Martin Trow のいわゆるトロウ・モデルについて触れながら、日本の大学進学率が男子 56.1%、女子 45.8%であること、大学進学率は都道府県ごとに違いがあること、また他国との比較について述べた。

さらに、日本の大学の歴史を 1877 年の東京大学開学から、1949 年の新制大学発足まで簡潔に説明した。

第3回

宇都宮大学の歴史・戦前編として、栃木師範学校と宇都宮高等農林学校について講義した。授業では、学生を励ますことに心がけ、前記2校の先駆性ないしは重要性について説明した。

栃木師範学校については、同校は 1873 年に文部省設置の東京師範学校に次いで 2 番目に設置され、全国的にも設置が早かったこと、同校教員・林多一郎が『小学校教師必携補遺』を著し、同書は明治期の貴重書として知られていること、などを説明した。

宇都宮高等農林学校については、1922 年に全国的配置計画にもとづき、全国でも 7 番目に農業系の実業専門学校として設置されたこと、同校では海外進出に貢献する人材養成を標榜し、英語以外に露語、中国語なども教授されていたこと、などを説明した。

そして、こうした歴史を過去の遺物にするか、それとも伝統にするかは、本学に所属する教員、学生の主体性にかかっているのではないかと問いかけた。

第4回

現在の宇都宮大学を構成する前身校の一つである宇都宮高等農林学校について講義した。

初代校長を務めた佐藤義長の生涯をたどりながら、佐藤の母校である駒場農学校の歴史（東京農林学校→帝国大学農科大学乙科→同実科→東京高等農林学校→東京農工大学へと名称を変更しながら発展）、佐藤の前任校である盛岡高等農林学校とそこを辞職

せざるを得なかった理由、東京農工大学、盛岡高等農林学校と宇都宮高等農林学校との関係、宇都宮高等農林がこの地にできた経緯、第1回卒業生によって建設された得業記念碑、昭和4年に農業経済学科で起こった思想弾圧事件「EP ニュース事件」とその事後処理をめぐる話、創立当初の宇都宮高等農林学校においては海外志向が非常に強かったことなどを説いた。

第5回

終戦から大学紛争前までの歴史を扱った。戦後の学制改革の時、前身校である宇都宮高等農林学校、栃木師範学校、栃木県青年師範学校はそれぞれ単独での大学昇格を試みたこと、「宇都宮」大学という都道府県名とは異なる名称を冠することになった由来、新制大学として発足する直前に火災が発生し、校舎を焼失したこと、工学部設置に至る経緯等を説明。

続いて、期末レポートの執筆について、特に、感想文との違い、参考文献の表記の仕方、引用の仕方など書き方についての具体的な説明をした。また、前回までに受講生に書かせた調べ学習で予定しているテーマについて、簡単なコメントをするとともに参考文献の一例を紹介した。加えて、調べ学習を進めるうえで必要な文献や論文の探し方に関して、CiNii や OPAC 等の情報検索サイトについて具体的な検索の事例を示しながら説明した。

第6回

ゲストスピーカーに、事務職員として本学に 40 年以上勤務している塩野目正昭工学部事務長を呼び、「事務職員から見た宇大の 40 年」という講演を聞いた。大学が位置する栃木県や宇都宮市について全国の他の自治体との比較から話は始まり、お茶当番や宿日直当番、電話交換手など週休二日制が導入される以前の国家公務員時代のこと、思い出に残る学生や教員についてのエピソード、パソコンや FAX、電卓がなかった時代の事務仕事の実際等について興味深い貴重な証言を得た。

第7回

授業の中にキャンパス内の散策を取り入れることは、大学の歴史について受講生の関心を惹起するうえで効果的であるという¹¹⁾。また、教室を飛び出して実際の現場（フィールド）に足を運ぶことは、この授業が目指すアクティブ・ラーニングの趣旨にも沿うことから、キャンパス内を歩き随所を見学した。

まずは大学と地域社会の連携を担う施設「UU プ

ラザ」に向き、同時期に開催されていた企画展「宇都宮大学の歴史」を見学した。この企画は本授業と趣旨を同じくする点が多く、とりわけ展示されていた史料・資料類は受講生にとって調べ学習を進めるうえで多大な参考になったと思われる。その後、旧正門があった場所、峰が丘講堂の内部、書庫として利用されていた大谷石造りの蔵、イギリス式庭園、日本式庭園、フランス式庭園を見学した。日本式庭園においては終戦までその付近に奉安殿が存在したことを説明。フランス式庭園では池の建設記念碑、第一回卒業生（得業生）による得業記念碑、フランス式庭園の建設を記念して初代校長佐藤義長が建立した石碑の説明をした。

第 8 回

各受講生に調べ学習の進捗状況について発表を求めた。各人の報告について互いに講評させるとともに筆者（廣内）からもコメントを加えた。各受講生はそれぞれ、学生のアルバイト、広く学生生活全般に関するもの、大学歌、工学部関連、サークルの歴史といった興味深いテーマを自ら設定し調査を進めていることが確認できた。丁寧なレジュメの作成やパワーポイントによるスライドの準備が行われるなど、この授業に対する積極性がうかがえた。

第 9 回

大学の近隣に 70 年以上に渡って暮らし、牛乳の製造販売業を営みながら本学がある峰地域の歴史を見つめて来た永島宏氏を招き、大学および学生の変化、キャンパス周辺の街並みの変遷について話をうかがった。事前に用意した周辺の地図や様々な店舗の名称と位置が記された資料を見ながら授業を展開して頂いた。鶏峰神社や峰地蔵尊についての説明もなされた。永島氏の自宅に住み込んで牛乳店を手伝いながら本学に通っていた学生が複数いたこと、昔の留学生との思い出話などもご披露頂いた。

第 10 回

学生文化史と題し、日本の大学生全般についての文化と宇都宮大学生独自の文化についての講義を試みた。前者の学生文化一般については、学生の日常を切り取った写真類を見せたり、昭和期後半については当時の若者向けファッション誌を回覧した。しかし、本学独自の学生文化については資料を揃えることが容易ではなく不十分な内容に留まった。原因はまずもって担当した廣内の力量不足に他ならないが、加えて本学の沿革を記した資料類の中に、学生

文化についての記録が乏しいことも挙げられよう。

これを考慮すれば、宇都宮大学生の文化については、宇都宮大学出身の本学教職員を集めてシンポジウムを実施することや、あるいは、こうした OB/OG 教職員を訪問して在学時の生活や行動様式について聞き取り調査を行うことのある必要があると言える。また、今後、新たに年誌を編纂する場合は、部やサークル活動はもちろんのこと、日常生活における宇大生の特徴、例えばファッション等の文化についても紙幅を割くべきであろう。

第 11 回

本学の学部学生として 4 年間、教員として 40 年近く勤務している農学部農業経済学科の津谷好人教授の研究室を全員で訪問し、自由に質疑応答ができるゼミ形式をとり昔の話をうかがった。本学における大学紛争は、学生寮の管理をめぐる争いや、栃木県の教員採用試験の選考過程に疑義が認められたことが主たる原因の一つであったことや、古き良き思い出として、1980 年に、学生達と登山隊を結成し、ヒマラヤのバルンツェを登頂した体験を当時の写真を交えながら語って下さった。

第 12 回

「宇大の入口と出口」と題し、「入口」としては入試関連事項とりわけ宇大生の出身都道府県の分布について、「出口」については、卒業後の進路状況について講義した。入試に関しては国立大学の入試制度が一期校、二期校に分けて行われていたことや共通一次試験の導入、戦後、新制宇都宮大学第一期生の入学状況は定員充足率が学芸学部（現教育学部）で 66%、農学部でも 87%に留まっていたこと^{1) 2) 3)} 紹介した。都道府県別の出身状況については、栃木県、茨城県、福島県といった周辺県からの出身者が多いことに加え、静岡県出身者が目立つことを説明した。県内出身者はここ 10 年以上 30%台を維持していること、この値を、例えば兵庫教育大学の学生に占める兵庫県民の占める率（約 69.7%、平成 23 年）など他の国立大学と比較して示した。また、留学生が多く在籍する大学上位 30 校を紹介するとともに、栃木県内の 17 の高等教育機関が受け入れている留学生数および出身国の内訳についてデータを示した。卒業後の進路については、就職内定率の説明をした後、本学各学部卒業生の近年の就職内定先について具体的な企業名を列挙した。

第 13 回

大学紛争といえば 1960 年代後半に全国的に波及した現象と捉えがちであるが、戦後間もない頃から程度の大小はあれ、繰り返されてきたことであること、また、紛争の火種となる原因には、法律（大学管理法等）の制定への反発、授業料値上げ問題、私立大学における不正経理、本学でも紛争の発端となった寮の管理権をめぐる問題など様々であることを解説した後、付属図書館に保管されている紛争時代のピラや新聞記事の切り抜きなど、大量の一次史料を教室に運び込み、受講生に実際に手に取らせ、興味深いものを見つけ次第互いに報告させあった。

第 14 回

大学教育の中で一般教育や教養教育と呼ばれる教育についてその歴史の変遷と意義について講じた。特に、戦前の旧制大学にはこれらの教育が存在しなかったが、戦後の大学改革により導入されたこと、1991 年の大学設置基準の大綱化までは、人文科学系、社会科学系などといった細かな区分ごとに修得単位数が定められていたこと、大綱化以降それぞれの大学が教養教育の在り方を模索していること、教養教育の意義や専門科目との関連について説明した。

第 15 回

調べ学習の最終発表。全員にレジュメを配布するように指導したうえで発表させた。どの受講生も、第 8 回の中間発表以後、精力的に調査を進展させており興味深い研究成果を聞くことができた。その詳細については次節に譲る。また、レポートの執筆について再度注意事項を述べるとともに、この授業のために廣内が独自に作成した授業評価アンケートへの回答を依頼した。

5. まとめと今後の課題

本授業では、半期を通して自らが設定したテーマについて調べ学習を行うことを課題とし、途中 2 回発表させ、かつ期末レポートとしてまとめさせた。受講生が取り上げた事柄は多岐にわたり、分量的には少ないもので A4 にして 4 枚、多いものでは同じく 13 頁に達する大作もあった。提出されたレポートは次の 5 編である。

- ・本学の部・サークル活動についてその歴史と現状を調べたもの。個別事例として漫画研究会を取り上げ、発展の経緯と定例活動等の詳細に迫ったものの。

- ・本学にまつわる歌、すなわち「宇都宮大学歌」、 「宇都宮大学自律寮々歌」、 「宇都宮高等農林学校歌」、 「宇都宮大学自律寮逍遥歌」、 「宇都宮大学コチャエ節」を歌詞と共に紹介し、東京にある有名私立大学と比較して、なぜこれらの歌が本学学生の中に浸透していないのかを考察したもの。
- ・本学学生のアルバイトに関するもの。1988 年と 2010 年に本学で実施された学生調査の結果をまとめた資料にあたり、そのデータを再構成しながら 2 つ時点におけるアルバイトの実態（職種、収入額等）を比較するもの。加えて、今後同様の調査を行う場合に用いるべき調査票のモデルを設計し提案したもの。
- ・日本の大学生の日常生活（ファッション、就職活動、学生生活等）について、聞き取り調査の結果を踏まえて報告したもの。峰キャンパスの東隣（久部街道入口）にある斎藤タバコ店を訪問し、現在の「複合施設」の場所に寮があった当時の寮生の食事や服装の様子、また、いわゆるバブル期に大学生を送りアルバイトで多額の収入を得ていた男性の証言などをまとめたもの。
- ・工学部が位置する陽東地区の歴史と工学部の歩みについて、地元自治会が作成した記念誌を用いながら調べたもの。

これらのテーマはすべて受講生自らが着想したものである。本学の歩みについては、少数の年誌以外に資料となりうる文献がほとんど刊行されていないこと、また一部の大規模大学のように文書館や史料室も整備されておらず、一学生が自由にアクセスできる史料類が限定されていることを考えれば、どの受講生も非常に健闘していると言えるだろう。特に、大学近隣の店舗に自ら積極的に出向き古い時代の証言を得てきた学生がいたことは、久しく途絶えがちとされる大学と地域住民の交流という観点からも評価できる。

次に、筆者が独自に作成し回答を依頼した授業評価アンケートの結果をしてみる。まず、15 回の授業のうち、学生文化を取り上げた第 10 回を興味深かった回として挙げた者が 5 名中 4 名いた。この回でははるか遠い昔の話だけでなく、バブル期のファッション雑誌を準備して見せるなど、比較的最近の学生の実態に迫ったことがこの結果に繋がったと考えられる。半期全体については、それぞれ次のような

感想を寄せている。以下に、筆者の責において趣旨を変えない範囲で要約して掲載する。

受講生 A

「宇大の歴史についてはこれまで全く知識がなく、自分が知らなかった宇大の情報を知ることができて有意義であった。少人数のゼミのような形式は質問や意見交換もしやすくよかった。他の授業のように知識を暗記する科目ではなく、自分の大学について毎回異なるトピックを知れる斬新な授業であり比較的楽しめた。」

受講生 B

「大学について知るための授業があるとは思っていなかったのが驚きであった。学生運動や学長のクビなど、宇大の裏側を知ることができ友人や家族に教えたくなった。また、永島さんの昔の宇都宮や学生についての話とも興味深く、「今の学生は地域とのコミュニケーションが減っている」という言葉をちゃんと受け止めたいと思った。」

受講生 C

「初めこそ単位のために取った講義であったが、自分のテーマを見つけ進めるうちこの分野について興味が出てきた。これからも独自に研究したり調べたりしていきたい。」

受講生 D

「少人数という特性を活かして意見交換をする機会が多く、とても刺激的だった。宇都宮大学について初めて知ったことが多かったので友達を驚かせようと思う。」

受講生 E

「先生と学生との距離が近く、リアルタイムで質問への応答が得られたことは良かった。全 15 回の前半は歴史の話が大半であり、ややお堅い感じがして私には重かった。これほど歴史の話が多いのであれば、科目名を「宇都宮大学の歴史」としたほうが適切ではないかとも思った。」

今回は受講生が 5 名と少なく、担当教員との間に親密な関係が形成されつつあったため過度に好意的な感想が出やすいことは否めず、そこは割り引いて受け止める必要がある。しかし、それでもなお大半の受講生がこの授業の意義を理解する向きにあることがうかがえる。

今後は、本学の歴史と現状のみをただ通史的に講

ずるだけに留めず、宇都宮大学という一学校の歴史を介して、日本の近現代史にまで思索を深める授業に発展させていきたいと考えている。近代に入り日本に「大学」が輸入され、それが拡大・発展を遂げていった中で、本学が果たした役割はどのようなものであったかを意識できるよう、本学にまつわる話と昭和史とを常に往復しながら授業を展開することによって、受講生が生きる当代を相対的に浮き彫りにする。そのことが、他のアクティブ・ラーニング科目においてより直截に扱われている現代的課題を鮮明に理解するための土台となるような授業こそが筆者が今後目指す「宇大を学ぶ」の姿である。

参考文献

- 1) 立教大学全学共通カリキュラム運営センター：「「自校教育」の意義とその可能性を考える」（「特色ある大学教育支援プログラム」採択記念シンポジウム I 筆録）、『大学教育研究フォーラム』、第 11 号、立教大学、2006 年、pp.46-93
- 2) 寺崎昌男：「自校教育の役割と大学の歴史—アーカイブの使命にふれながら—」、『金沢大学資料館紀要』、5 号、2010 年、pp.1-17
- 3) 湯川次義・久保田英助・野口穂高・大岡紀理子・大岡ヨト：「「自校史教育」に関する基盤的研究」『早稲田教育評論』、第 24 巻第 1 号、早稲田大学教育総合研究所、2010 年、pp.169-188
- 4) 中央教育審議会：『学士課程教育の構築に向けて（答申）』、2008 年、p.36
- 5) 大学基準協会：『新大学評価システム ガイドブッカー平成 23 年度以降の大学評価システムの概要』、2009 年、p.22
- 6) 大川一毅：「大学における自校教育の現状とその意義—全国国立大学実施状況調査をふまえて—」、『秋田大学教養基礎教育研究年報』、第 8 号、2006 年、pp.11-21
- 7) 山口拓史：「国立大学における自校史教育の意義—名古屋大学を事例として—」、『名古屋大学史紀要』、第 11 号、2003 年、pp.91-116
- 8) 豊田雅幸：「自校史教育の持つ可能性」（授業探訪 立教科目「立教大学の歴史」（大学））、『大学教育研究フォーラム』、第 13 号、立教大学、2008 年、pp.35-38
- 9) 小宮山道夫：「大学生の自校史教育受講に対する期待と需要に関する考察」、『広島大学文書

館紀要』，広島大学文書館，2011年，p.104

- 10) 大川一毅：「全国大学における自校教育の実施状況－2008年度「自校教育実施状況調査」をふまえて－」，『大学教育学会誌』，第31巻第1号（通巻第59号），2009年，pp.172-178
- 11) 湯川ほか：前掲書，p.178
- 12) 宇都宮大学教育学部史編纂委員会：『宇都宮大学教育学部百十五年史』，1989年，p.282
- 13) 宇都宮大学大学史編纂委員会：『宇都宮大学四十年史』，1990年，p.40